

一向過渡期世界論の防衛と発展のために(2)前史
ゲバラ＝カストロ路線とわれわれ 1967.11

現代過渡期世界と世界革命の展望 1968.8

4・14シンガポール・クエート連続作戦勝利万歳！
パレスチナ・アラブ人民連帯集会へのアピール 1974.4

序 「ゲバラ＝カストロ路線とわれわれ」「8・3論文」
を復刻するにあたって

目 次

ゲバラ＝カストロ路線とわれわれ 2

— いわゆる世界革命の第三の道派について —

現代過渡期世界と世界革命の展望 24

— 世界プロレタリア統一戦線 ·

世界赤軍・世界党建設の第一歩ハ —

4 • 14 シンガポール・クウェート連続作戦
勝利万歳！ パレスチナ・アラブ人民連帯集会へのアピール · · · · ·

この両論文は、前者は「烽火」No.5（関西ブンド理論機関誌、一九六七年一月三日発行）に掲載されたものであり、後者は、ブンド機関紙「戦旗」No.一四一、一四二合併号（一九六八年八月五日発行）に掲載されたものです。
連赤敗北以後、同盟内に、今までの同盟の闘い、理論を全て否定し清算していくという清算主義が生れ横行する中で、同盟の闘いの歴史を正しく総括し、更に発展させる為に、赤軍前史・赤軍派誕生の出発点ともいえる、この両論文を復刻することは意義のあることだと考えます。この論文の現在的意義に関して、序文を同志塩見が書く予定でいましたが、復刻の必要性の高まっている現在、早急にこれを復刻することが急務であると考え、時間的余裕の制限から、「序文」なしで復刻に乗り切らざるを得ないことを同志諸氏の了解を得たいと思います。しかしながら、既に発刊された「論叢」No.6が、今回復刻されるこの両論文の「序文」の役目を十分に果していると我々は考えます。同志、読者諸氏は、「論叢」No.6を合わせて読み御検討いただければ幸いです。

ゲバラ・カストロ路線とわれわれ

—いわゆる世界革命の第三の道派について—

△IV 世界革命の第三の道派の登場とわれわれ

真の革命闘争の開始とインターナショナリズムの復活が中南米階級闘争において実現の途についた。

「ベトナムと自由の為の世界闘争」（ゲバラ論文・本年四月発表）、「武装闘争＝解放への唯一の道」（四月カストロ演説）をその内容としたOLAS会議での中南米革命家の鉄の団結の確立がそれである。

彼等の、ここ一〇年余の生死をかけた実践的経験の結晶は、我々に「勝利か死か」の階級闘争を呼びかける。彼等のさけひびは、我々に巨大な衝撃を与えた。彼等が世界革命の与えられた部署において定められた任務を言葉通り英雄的に果し始めたのに対し、我々先進国共産主義者のまづ何よりも自覺し、果さなければならぬことは、我々こそが定められた任務を果しきれず、後進国民に、とりわけベトナム人民や中南米人民に、世界史の全重量を負担せしめ、犠牲を強いている。

こと一 そのことを彼等はあえて勇敢に引き受けているが一、であるし、我々が彼等の階級闘争の領域に急速に入り込み、彼等に追いつき、彼等の巨大な負担を、いくばくなりとも我々が背負う闘いを組織することである。

我々は彼等よりも前進しているのか、否！ 我々は立ち遅れているのだ！

一〇・八羽田闘争は、全世界の労働者、人民に、とりわけ、ベトナム人民と彼等に対する我々のささやかな挨拶である。全世界の彼等の戦闘宣言に対する反響は端たって二通りであり、その対応には天地の隔たりを示した。

その一つの典型は、

バランニスヴィジー（米国）や構改派諸派であり、総じてソ連派である。（勿論日共も、その一部である。）他方ブラックパワーの提唱者カーマイケル達である。

バランニスヴィジーその「力作」、「独占資本」に於て、米資本主義を分析し、結局のところ、米国での革命の不可能

性と後進国からの反撃が米帝国主義打倒の早道であることを力説し結論づけている。そして最後の結論はなんと「ゲバラに捧げる」である。なんと素町人の俗物的なことか。彼等の理論にその限界性は幾つも指摘できるであろうが、問題なのはその理論を支える思想そのものに根底的な病弊が潜んでいる。アメリカ帝国主義の矛盾は、他の誰が解決してくれるものではない。種々な闘争の段階や闘いの型態、そして世界革命での戦略配置の問題は、れ、つまる所、アメリカ人民によつてしか解放できないことに對する全くの無自覚である。

「現代の理論」にたむろする諸君は、彼等に対し「眞の國際主義の復活だ」と最大限の賞賛の辞を投げかけているが、何が「國際主義の復活」なのは、一向に明らかでないばかりか、米ソを中心とする核戦争回避の努力、積極的共存政策に對する肯定的評価は全く見られない。……ひとき目にみてても、そこには第三次世界大戦の現実的危険に對する歯どめが欠けており、後進地域の解放運動の立場からする一面的な

第三期階級闘争の展開は、如何なく、帝国主義的日本見主義の理諭的表現こそ彼等の世界観であり、逆に右翼日和見主義の震源地が、その理論にあることをあざき始めた。OLASへの彼等の対応も又その一部である。

いざれにしても、彼等の対応からは、アレコレとゲバラ・カストロの部分を抱えての批判によつて、自己の世界観の防衛に努める「エセ革命家」のサエズリの域を出ないし、ゲバラの呼びかけに実践で應えることなどは更になし。追いつくための闘いを組織する実践的的前提を踏えない限り、一切は抽象的天界に昇天し、先進国の共産主義者をしてエセ革命家に転落せしめるだろう。日共はどうか。彼等は構改派諸氏よ

りも巧妙であり、慎重である。赤旗での報告は、その内容にふれず、中ソ論争に対する「第三の道」が彼等の自立路線と同質であることを強調しているが、彼等と日共との根本的相異はいうまでもない。八月原水協でのキューバ代表が全学連・反戦青年委の砂川闘争を全面的に評価したことに対し、動搖が隠せなかつたことが伝えられている。

「ベトナム人民と連帯しようとしている世界の進歩的陣営は市民達の拍手を受けてローマの競技場に立つてゐる剣闘士をながめているような苦いアイロニーを感じる。犠牲者の勝利を願うだけでは十分でなく、なすべきことは死と勝利の谷間で運命をともにして闘うことなのだ。ベトナム人の孤立について語るとき、我々は人間的な苦痛を感じる。アメリカ帝国主義の侵略は罪である。この罪は大きい。この罪は全世界が知つてゐる。諸君！ 我々もすでに知つてゐるのだ。しかし決定的な瞬間に動搖しベトナムを犯すことのできない社会主義の領域としなかつた者も、同様に犯罪者なのだ。まさしく全地球的な規模の戦争の危機をつきつけて、北アメリカ帝国主義者に決定を迫るべきだ。また社会主義陣営の二大勢力相互の侮蔑と嘲笑に満ちた争いを続けさせている者もまた犯罪者である。」（ゲバラ、「ヴェトナムと自由の為の世界の闘争」）のゲバラの呼びかけに応えて野獣と剣闘士の闘いを苦いアイロニーを感じながらも観賞するローマ市民から、剣闘士の仲間に決して加わろうとしない、バランニスウェイジー、

なものである。われわれはヴェトナムの事態がこちらの側の我々の闘争に影響を与える、また我々の行動がヴェトナム人民の闘争に影響を与えてることをよく知つてゐる。」（同）
「勝利するか、さもなければ攻撃に失敗して殺されるかのどちらかだ、と叫んで我々は立ち上つてゐる。」（同）、SNCCやSDSにとって、全世界階級闘争との闘争による連帶は運命的・不可避的であり、先進国、後進国階級闘争、或いは資本主義国、非資本主義国にあっても、その関連が、どちら側の立場に立つても、メダルの裏表であり、不可分一体の等質性を有してゐること、しかも、それは言葉でなく行動に於いて貫徹されねばならぬことが明白に自覚されていることを確認しなければならぬ。

中共派はゲバラ・カストロ路線に対し、「一方ではソ連の修正主義指導者とその追随者がおり、他方ではアルバニアと中国を中心とする国際共産主義運動の健全な勢力があるのに対し、その間の矛盾について、ゲバラが皮相な妥協的判断しかもつてゐないことは嘆かざるを得ない。彼は、『……』と言つて真理とウソ、反帝闘争の一貫した戦士と『首連人民を含めて全世界人民の敵であるといふ正しい分析に到達すべきである……、もっとこういったからといって木

構改派、日共ソ連派に対し、我々は、剣闘士への連帶は我々が剣闘士になることによつてしか果し得ないことを自覺しなければならぬ。以上の反応に対し、他方でのカーマイケル達の反応はどうか。

アメリカ階級闘争については烽火三号、四号に詳しく述べられてゐるが、七月デトロイト反乱が続いている折、カーマイケルはOLAS会議に出席し、次のような演説を行なつた。それは、バランニスウェイジー達とは全く相異した、先進国共産主義者の実践的任務とその成果に裏打ちされたゲバラ・カストロに對等の資格を得たものの發言であった。

彼は黒人運動の發展段階と任務、黒人運動と白人労働者との連帶あるいはヴェトナム侵略戦争と米国反戦闘争、ラテンアメリカ人民との連帶としてアメリカ社会主義革命と世界革命との関連等を提起し、公然と米帝国主義打倒の内乱を提唱したのであった。ここでは二、三の彼の演説を引用するにとどめておけばよい。何故ならば、彼等は言葉でなく行動において見事に自己の思想理論を説明しているからだ。「われわれが同志である諸君にかかりかけるのは、我々の運命が相互に絡みあつてゐると考へてゐることを明らかにしたいためである。我々の世界は、ただ第三世界としてのみ存在し得るのであり、種々の闘争はただ第三世界のためであり、我々の唯一の展望は第三世界についてである。」（カーマイケル演説）「我々が進めてゐる闘争はインターナショナルな

を見て森を見ないのはいけない。ゲバラ論文にある多くの積極的一面を見落してはならない。」（フランスの中国派新聞「ユーニテ・ヌーギル」紙）、以上の見解を述べてゐる。中共派はゲバラ・カストロ路線に關してあいまいである。

以上大雑把にOLASに対する我々の基本的思想性と国际的反響を概観したが、我々が彼等に対する我々の連帶の立てる方を國際主義の立場を検討すればする程一層くつきりと、我々自身が、（1）世界階級闘争の段階と性格を如何に把えてゐるのか、（2）それとの関連で世界革命戦略は如何にあり、我々は日本に於て如何なる任務をもち、現在如何に行動しなければならぬか、（3）かかる（1）（2）には当然にも現在に於ける中ソ論争の決着と國際共産主義運動の指導部形成をいかに実践的に展望するのか以上のことを明確にすることを否応なく強いる。逆に、そのことは、ゲバラ・カストロ路線が、中ソ論争の不闇性に比し、実践的な問題であり、又そのように提起されてゐる有効性故に中ソ論争や中国文化革命を上まわる歴史的役割りを持ち得てゐるからに他ならない。

OLAS会議への反響に於ける、ソ連派、米国のSNCC、SDS、そして我々との典型的な相異、そして中共派のあいまい性をはつきりと前面に押し出したものこそ、とりもなおさず、戦後ヤルタ体制の動搖と第三期階級闘争の全世界的開始に他ならない。即ち第三期の開始に當つて、プロレタリア独裁＝世界革命派対平和共存＝一国革命・一国社会主義派の

相異の顕在化であるし、中共派のこの二極間の動搖である。

これ等のことの意味は、第三期階級闘争の発展がゲバラ・カストロ路線、SNCO（ラックパワー）、SDS、我々の如き、プロ

リ五〇年代の闘いはスターリニズムとは全く相対的別個を創造

的実践的な党派が登場し、過去の体制間矛盾・平和共存一国社会

主義建設・後進国民民族解放、先進国・人民戦線派と真向から

階級闘争推進の実践的観点からして対立し始めたこと、他方

中共派がソ連派に対しても経験主義の次元でしか実践的批判を

なし切れないが故に同時に、自己自身の新たな第三期が展開

するのに対し、その推進が経験の領域を越えるが故にその対応は常にプログラマティックであり、動搖し、第三の道派に対するあいまいにならざるを得ないのである。

国際共産主義運動の対立と分裂は、今や始めて過去のスターリン主義の枠を、大きく飛躍した新たな第三の道派の全世界至る所での登場をもってはじめて国際的規模で現実の実践に結びついた対立と分裂として統一の時代へと歩を踏み入れつつあるのだ。

現実の闘いが、ナショナリズムと暴力に對して、分解しつつある大衆を全世界に世界革命の一点に向け組織する作業は、

ゲバラ・カストロ、あるいはカーマイケル達によつてもつま

びらかでないし、その論理化はいまだ原則の領域を出ないものであるかも知れないが現実に要請された、帝国主義の暴力

検を行なうことにしよう。

彼等の歴史的、経済的、社会的背景については烽火(3)(4)号の情勢分析、葛木論文においてのべられているから多くを述べる必要はない。ここで主要に、(1)キュー・バ革命が第三期への突入過程で如何に対処しているかを、主に、中国文革やその世界革命との比較関連で明確にすること、(2)キュー・バを含んだラテンアメリカ諸国がOLASで、①世界革命戦略を如何に立て、彼等の任務を如何に位置付けているか、②後進国に於ける社会主義革命と民族自決に対する態度、③、④と⑤との関連で統一戦線・戦術はどのように位置付けられているか、いわゆるゲリラ戦・武装闘争とは何か、⑥先進国との結合の国際主義、⑦新植民地主義・勢力圏形成の先進帝国主義の動向に對して、後進国革命闘争が恐らく部分的孤立の不可避性が生じるが、これを如何に把握しているか、⑧中ソ論争に対しての彼等の国際革命指導部の考え方、等が検討されねばならない。(3)に、又、SDS、SNCC等の先進国運動の態度、以上三点が検討されねばならない。以上を基本的に確定する為に我々これらに対する基本的観点を明らかにしておこう。

しての彼等の国際革命指導部の考え方、等が検討されねばならない。(3)に、又、SDS、SNCC等の先進国運動の態度、過剰と史上三度目の市場再分割戦に突入し、世界ヤルタ体制の政治的再編が進展している。アメリカ帝国主義の圧倒的経済的優位と政治的世界支配は、「社会主義国」の対応を帝国主義との国家間対立に世界政治に引き込み、「社会主義」諸

との日常的対決は、「勝利か死か」の合い言葉にも見られる如く、現代世論を突き崩す新たな世界觀と体質を原初的に確立しているのである。

そのことが、正しくスターリン主義やスターリン主義の残滓を残した部分との根本的相異せしめつつある理由なのだ。

我々はあえて、我々と共に今後の国際共産主義運動を担う部分が誰かと問われるなら、まごつくことなく、第三の道派と答えるだろうし、今後先進国、後進国とりわけ西欧に於て続々、第三の道派が登場してくることを確認するものであるし、かかる第三の道派の階級闘争の前進こそが中共派の経験主義的、地方主義的闘いをはつきりと世界史的な性格に変質出来得る唯一の方向である。

我々は以上の結論的視点の下に、再度(1)より詳細に整理し第三の道派の歴史的位置とその理論的点検、毛沢東派との実践的結合の方向、ソ連派の帰結と党派闘争の方向、第二にこれらを含んだ第三の道派の基本的課題としての世界戦略と世界革命の前戦についての任務を基本的に明らかにすることによつてOLAS会議への我々の態度としよう。

△▽ 第三の道派とは何か――

彼らと毛沢東、ソ連派

それでは第三の道派とは一体何か。△▽の項で述べた観点に従いながら彼等の歴史的、経済的、社会的背景と理論的点

国内部に於ける階級闘争を米ソのヤルタ体制にここでも吸引したのであつたが、かかるヤルタ体制を世界帝国主義の市場再分割戦は内部から突き破りつつある。かかる世界帝国主義の動向を軸に、第三期階級闘争は、帝国主義の侵略、ナショナリズム、暴力に对抗する唯一の展望を、プロレタリア独裁・世界革命をめざす、国際的連帯を基礎にした武装闘争の開始に運命を任せている。とりわけ先進帝国主義間に於ける対立紛争は、先進国階級闘争をして、自國帝国主義打倒の先進国・後進国階級闘争との連帯を増々鮮明にしつつある。(注)

注 これ等は米帝国主義に對して、相対的劣位にある西欧、日本に於いて、或いは西欧内部の、各国の対立に於いて、留意されねばならない。この試験は六九年NATO改編、七〇年安保・沖縄問題に於いて試されるだろう。

更に「社会主義」の防衛や、「社会主義」内部の階級対立も又、等しく、世界革命に向けてその一環として第三期階級闘争と結びつく以外には脱出口をもたない。

これ等のことは、先進国・後進国・「社会主義」国家の諸矛盾がプロ・世界革命によって唯一解放されることを示すものである。以上のことを満足させつつあるものとして、SDS、SNCC、カストロ・ゲバラ路線は存在するし、他方ソ連派の、平和共存・一国社会主義一二段階戦略路線が破綻し犯罪性を顕在化せしめる時代である。

そして、中国派は、ソ連派修正主義に対し、或いは、その世界的バッコに対し、反撃の烽火をあげた点において決定的優位性を示しながらも、自己の世界革命戦略と、国内階級闘争に於けるプロ独運動の結合関係のあいまい性、或いは世界革命戦略に於ける、中国の農村から都市への周辺革命の引き移しとしての部分性を全体性に昂めている点に於いて、国際階級闘争の連帶に對して一面的である。プロレタリア独裁運動はそれ自体完結するものでなく、世界革命と結合し、それに向け用意されるものとしてなければならない。彼等の欠陥は世界帝国主義が独自の勢力圏形成に向け新植民地主義を巨大に展開し始める程顕在化するだろうし、その時点にあって彼等が先進国と後進国階級闘争、それ等と「社会主義国」とのプロ独運動との連帶を總体として把握する可能性を有するし、又その自党の促進的第三の道派の革命的任務である。

さて、以上の前提をふまえて、最初の問題提起に移ろう。

(ii) 五九年キューバ革命の成立以来、この二一三年間、キューバ革命は決定的な岐路に立たされていた。他方同様に中南米階級闘争も又、そうであった。ペネズエラのゲリラ闘争、キューバとソ連派共産党との論争、コロンビア、(ペルー、ボリビアの各ゲリラ闘争、ブラジル、アルゼンチンでのゲリラ闘争の準備、更にドミニカに於ける革命の不徹底、(ニカラグアニヨ)と米帝国主義の反革命武力鎮圧、等々、中南米階級

闘争はケネディの進歩の為の同盟計画の枠をのりこえつゝある。進歩のための同盟計画の典型的推進者ハブルジョア進歩主義のグラール政権(ブラジル)はクーデターによって打ち倒された。

このように、中南米諸国に於ける農業危機と米帝国主義の収奪が一層深化し、幻想的進歩の為の同盟計画の挫折とその枠内での民主主義的民族運動は分解した。アメリカ帝国主義のブントデル。エステ会議でのジョンソン演説は、一方で、中南米をして米帝国主義の独自の経済圏への包摂をねらいとして、保護主義基調と特惠関税による中南米輸入の受入れと援助の拡大をテコとして、他方で軍事的にはアメリカ正規軍の配置と特殊なゲリラ対策作戦を約束し、中南米に対する一層の経済的、軍事的テコ入れの下に中南米革命の反革命抑圧を実現するものとして貫ぬかれていた。米帝国主義と各国の階級配置は、米帝国主義と民族ブルジョアジー、地主、軍閥のブロック、農民、労働者、学生、知識人、その他との非和解的対立へと転化しつつある。

そしてかかる、米帝国主義、民族ブル、地主、軍閥対農民、労働者、知識人、学生との非和解的対立は、中南米階級闘争を農民の土地革命の要求とプロレタリアートとの資本主義打倒との要求を、国際的規模に推し拡げ国際的反米帝・社会主義革命に永続的に發展せしめつつあるし、中南米での連帯を基礎に全世界の労働者人民(とりわけアメリカブルジョア

アート、人民)との連帶を通じたインターナショナルな性格を必然的に帯びつつある。これ等の中南米階級闘争として、ベトナム人民の英雄的戦いの持続と北ベトナム革命の革命的防衛、或いは米帝国主義内部からの自國帝国主義打倒の指導部をもつた反戦闘争の昂揚は、キューバ革命の新たな発展の方向を決定したのであった。キューバ革命の岐路と彼等が決定した路線は何であったのか。今一度キューバ革命にたち帰ろう。

この問題を明らかにするには、カストロとゲバラの関係を明らかにすることから始めるのが適切である。一九六四年一二月、チェ・ゲバラはアルジェ・北京・カイロを訪問し、一九六五年三月帰国後ぶつかり消息をたつた。そして、更迭説、失脚説、病氣説、死亡説、フィデルとの不仲説等が流布され、同年十月カストロはキューバ共産党結成の際、チェがキューバを去った旨を明らかにした。又してもさまざまな説が流布され始め「中国派のゲバラは去り、カストロはいよいよソ連路線に切り換える決意を固めた」(一九六五年一〇月九日朝日新聞)などと勝手な推測までとびだした。偏狭で性急な第

四インターのトロツキスト達は、一九二五年一二九年のロシア革命の防衛と世界革命をめぐつた、トロツキー、スターリンの分派闘争を現在のキューバに焼き直し「F.カストロはゲバラ追放という方法をとった。……こうしてソヴィエトは官僚によって追放されたのである」(一九六五年J.ポサダ

革命はケネディの進歩の為の同盟計画の枠をのりこえつゝある。進歩のための同盟計画の典型的推進者ハブルジョア進歩主義のグラール政権(ブラジル)はクーデターによって打ち倒された。

かかる彼等の対応は一九二四、五〇九年に遭遇したロシア革命の問題、今その問題を経験主義的に対応しようとしている毛沢東とは異なり、全く次元の違う、中南米階級闘争との結合を基礎に国際的反帝統一戦線と世界革命の実現に向け、プロレタリア独裁運動を推進していくことであつたし、それを抜きにしてキューバ革命の防衛も有り得ないとする最も革

命的原則的対応であった。ゲバラやカストロの決定的飛躍へ

の判断の根拠には、英雄的なベトナム人民と北ベトナム革命の不屈の防衛の可能性の実例、中南米階級闘争の展望、アメリカ国内での革命闘争の開始等が恐しく大きく入っているに違いない。

ここ二、三年論争されていた、謂ゆる「物質主義か、精神主義か」の社会主義国に不可避の論争に彼等は世界革命の達成の実現から、それを止揚したのであった。

確かに彼等のかかる決断は、全ゆる意味で直接的犠牲を覚悟しなければならなかつた。米帝国主義によるアメリカ大陸からの経済封鎖と、キューバの国際収支の悪化、砂糖きび生産の低下、そしてキューバが砂糖や工業製品の供給に対する

市場として、未だに「社会主義国」に依存している悪条件を考えすれば、彼等の対応はすぐれて革命的である。

彼等はソ連の政策に対し「物質的刺激は、革命遂行上の諸問題に関する解決とはなり得ず、物質的刺激を重くみる人々と我々は戦わねばならない。社会主義国で物質的刺激が指導的役割を果すとすれば、それは退歩であり、資本主義への変質である。」（一九六五年八月一日グラント・セーナサ）「實際には資本主義の道を歩んでいるのに、共産主義を建設しているのだと信ずる事が、全く可能であり得るのだ」（カストロ演説）カストロ演説は感情的な中国批判が消え失せ、公然とソ連とその追随者に対する批判がうかがえる。ソ連がチリーのフレイ政府との間に交わした通商金融

てのボルシェヴィキ党の目的意識的掌握に対する軽視である。

二八・二九年一三三年に至る世界恐慌と革命か反革命の時代に、かつロシアに於ける富農の胎頭、階級対立、これ等を世界革命の同時性を準備すべくロシア内部でのプロレタリアートの比重と独裁を用意し、工業化の促進を位置付け、スターリン主義と対決する必要があった。トロツキーはボルシェヴィキ党、第三インターの分裂に対し不決断であり、二九年合同反対派の結成は遅すぎた。このことについては別の機会に詳細に述べる。

現在中国やキューバが遭遇している地點は正にトロツキー、ブハーリン論争から、トロツキー、スターリン論争の地點であることは疑いを容れない。

この地點にあって、毛沢東は、国内に於ける実権派の批判とプロ独運動を強めながらも、かかるプロ独運動が、後進国

社会主義革命と先進国（特に日本）に於ける革命に向けて準備することに對して軽視し、後進国解放斗争に軸をおいているし、又國際階級斗争との結合が不可避であることに対する自覺が弱く、中国文革運動は明確な世界革命戦略としてないが故に、その運動は常に浮動している。精神主義や個人崇拜等を生み落す基盤や一国社会主義建設に転落する歯どめもその世界戦略には明白にみいだし得ない。勿論このことは我々の日本での運動での弱さと不可分であり、かつ将来に於いて、

協定を批判して「キューバに対し敵対的な政策を取つてゐるフレイ政府はその反動的な帝国主義的な政策を露骨に推し進めているが、そのフレイ政府を援助しているソ連はアメリカ帝国主義と同じような役割を果してゐる」（カストロ）と強くソ連に警告を發している。

以上のことからキューバ革命の遭遇した問題点と、彼等が如何なる方向にかじを向けているかは明らかである。ゲバラリカストロ路線は、史上、プロレタリアート権力が遭遇した最も困難な事業に對し最も有り得べき創造的な切り込みを開始しつつある。

レーニン死後の第三インターはこの問題を解決し得ずスターリンの一国社会主義建設に世界階級斗争を從属せしめ、各國階級斗争を反ファシズム・民主主義防衛路線に転落せしめ国际的労働者人民を血の海におぼれさせた。ただ一人斗い抜いたトロツキーも又、ソ連社会主義建設とプロレタリアートを世界革命戦略（特にヨーロッパ）の一環として把握し、そのもとにボルシェヴィキ党を鍛えあげることに挫折した。そしてロシア革命は農民の現状維持的要求とプロレタリアートの無気力性に染まつたスターリニズムを充满化せしめた。（注）

（注）かかる挫折の根拠は、根底的にトロツキーが世界同時革命戦略の明確な意識化とその下でのプロレタリアート独裁運動の確立、その環としてそれ等の担い手としたが彼等の理論内容はどうか。

（注）「OLAS 参加国は二七ヶ国、世界各国からオブザーバーの参加、その中にはカーマイケルも含まれる。OLAS の決議に決議案はウルグアイ、コスタリカ、エル、サルバドルが反対し一五対三、棄權九で採択された。議題は、①ラテン・アメリカに於ける革命斗争及び反帝斗争、②ラテン・アメリカに於ける帝国主義の政治的軍事的侵略並びに經濟的思想的浸透に対する共通の立場と行動、③民族解放のために斗争ラテン・アメリカ人民の連帯、④ラテン・アメリカ人民連帯機構（OLAS）の規約、以上である。」

その理論的検討のポイントは以下ほほ四点である。①世界革命戦略を、如何にたててゐるか、その中でラテン・アメリカ革命の位置を如何に位置付けてゐるか。②民族解放運動と社会主義革命の関連を如何に把えてゐるか、③統一戦線と戦術、④中ソ論争に對する態度と実践的解決の方向、である。
①④の順に検討していく。

（1）「要するに、はつきりさせておくべきことは、帝国主義が世界的規模での体系であるといふことである。それ故にそれは世界的規模の激突において打倒されるのである。」（ア

メリカ合衆国の政治的経済的支配は本質的に極点に達し、い化も、その主導的位置からの没落を意味するものである。それ故にアメリカ合衆国の政策はすべての征服状態を維持することに向けられ、いかなるものであれすべての解放斗争に野蛮な弾圧を加えるのである。」（ゲバラ）の如く、ゲバラ＝カストロは米帝国主義を世界的支配の支柱と設定し、その支配が三大陸人民の矛盾の深化と帝国主義、ブルジョアジー、地主、ブロックとの非和解的対立と世界的攻防が形成されると、その成熟を基礎に「二つ、三つのヴェトナム」を三大陸に主体的に起すことが、アメリカ帝国主義の力を動搖させ、分散させ、先進国内部からの反撃を準備するものになることこれ等の展望こそが世界革命に三大陸人民の課せられた任務であることを明言している。カストロは、「人民の革命斗争の発展につれて、合衆国人民は事態をよりはつきりとるだろう」（四月・カストロ演説）の項でアメリカ労働者人民の斗いを必須条件として明確に位置付けている。更にこのことを「ラテン・アメリカの斗争は、アジア、アフリカ社会主義諸国の人々および資本主義諸国との労働者の結びつき、なんづく階級的搾取、貧困、失業、人種差別、最も基本的な人権の否定になやまされているとともに革命斗争の重要な勢力となっているアメリカ黒人住民との結合をつよめる」とOLS一般決議の一八項で述べている。しかも彼等は彼等の任

であることを明言している。カストロは、「人民の革命斗争の發展につれて、合衆国人民は事態をよりはつきりさとるだろう」（四月・カストロ演説）の項でアメリカ労働者人民の斗争を必須条件として明確に位置付けている。更にこのことを「ラテン・アメリカの斗争は、アジア、アフリカ社会主義諸国の人民および資本主義諸国との労働者の結びつき、なんづく階級的搾取、貧困、失業、人種差別、最も基本的な人権の否定になやまされているとともに革命斗争の重要な勢力となっているアメリカ黒人住民との結合をつよめる」とOLAS一般決議の一八項で述べている。しかも彼等は彼等の任

カストロは米帝国主義を世界的支柱と設定し、その支配が三大陸人民の矛盾の深化と帝国主義、ブルジョアジー、地主ブロックとの非和解的対立と世界的攻防が形成されると、その成熟を基礎に「二つ、三つのゲエトナム」を三大陸に主体的に起すことが、アメリカ帝国主義の力を動搖させ、分散させ、先進国内部からの反撃を準備するものになることこれ等の展望こそが世界革命に三大陸人民の課せられた任務

メリカ合衆国の政治的経済的支配は本質的に極点に達し、いまやこれ以上の展開は望み得ない状態にあるのでいかなる変化も、その主導的位置からの没落を意味するものである。それ故にアメリカ合衆国はすべての征服状態を維持することに向けられ、いかなるものであれすべての解放斗争に野蛮な弾圧を加えるのである。——（ゲバラ）の如く、ゲバラ

務を世界的的觀点から明確にし、國際主義を打ち出しながらも先進国革命についての不明確な点では「世界はいま非常に複雑な構造をもつてゐる。自由の獲得という課題はいまなおヨーロッパ諸国の課題である。……旧ヨーロッパ諸国において矛盾が爆発するのは次の時代であつて、その矛盾の解決は我々のような従属させられ、經濟的に遅れた国とは異なる方法をとるであろう」世界階級斗争の有機的一体性と國際的連帶を原則的に踏えながら、なお慎重に留保している。だが、ゲバラ論文やカストロ演説の隅々まで先進国革命が、平和共存や議会革命の可能性を支持しないばかりか、真向から否定している、ことも又事実である。我々は彼等の見解を全面的に支持する必要があるし、我々こそが、彼等の後進国での世界戦略と横の國際統一戦線に対しして先進国からの世界革命戦略を提起し完成させる任務を負わねばならない。彼等の対応は中共派の周辺革命戦略の先進国への直線的持ち込みの教条主義とは異なる開かれた創造的実践的なものである。

② 「現代のいかなる変革も、それが社会主義革命でなければ、革命の戯画でしかない。」（ゲバラ）「ラテン・アメリカ革命の主要な内容は、帝国主義とブルジョア及び大土地社有独裁者との斗争である。従つて革命は、民族の独立、小数独裁者からの解放および完全な経済的・社会的発展のための社会主義の道をめざす斗争という性格をもつ」（OLAS、一般決議三項）或いはOLASの閉会の辞での「意味のない

判である。レーニンは一九二一—五年の著作に於いて、民族自決を主張し、民族ブルジョアジーとの提携をプロレタリアートの社会主義のヘグモニーを維持しつつ主張した。当时に於いては帝国主義と民族ブルとの明確な癒着はみられず民族ブルはその限りで一定の進歩性を有していた。勿論レーニンは民族解放斗争を世界革命の一環として先進国—後進国プロレタリアートの結合を橋杆に、プロレタリア世界革命に発展させようと考えていた。又一九二一年の「帝国主義と民族、植民地問題」では、ロシア革命の成立を経て、民族ブルと帝国主義との癒着を確認し、プロレタリア世界革命のヘグモニーの強化と民族ブルの反動性を強調している。尙、カストロの発言は、レーニン主義の「二つの戦術」に於ける「労働者農民の革命的民主的独裁」から一九一七年四月テーゼに発展する過程の質と同質であるし、考え方も「理論は教条ではなく実践の指針である」と述べている考え方と似通っている。又、四月テーゼをめぐってレーニンリトロッキー対、スターリン、カムスコフークノジエフの対立は、ブルジョ

の指針である」と述べている考え方と似通っている。又、四月テーゼをめぐってレーニンリトロッキー対、スターリン、カムネフリジノギエフの対立は、ブルジョ

何故カストロが教条主義の批判を敢てとりあげたかは、ソ連派がレーニンの文献を取りあげ、レーニン主義を御旗にして（実はスターリン主義者による二段階戦略論による歪曲であるが）民族ブルジョアジーとの同盟、議会主議路線を合理化することへの痛烈な批

く理解されてしまった。

(3) 統一戦線、戦術、斗争と前衛に關しては後進国階級斗争の獨特の対応を結論づけている。

OLAS宣言冒頭は「最も重要な階級斗争が深化するのは農村である。……現代の革命戦争は職業的軍隊と必然的に斗わねばならず我々は都市の大衆運動の敗北の経験から、多くは困難であると考える。しかし都市の労働者階級の重要な役割りを否定するものではない。労働者階級の役割りはプロレタリアートの思想を農村の解放斗争のなかで実践していく⋮⋮この革命戦争は農民の戦争ではない。それはプロレタリアートの思想に導かれる農村に於ける革命戦争である。革命運動の突撃隊であるゲリラは⋮⋮ゲリラは革命運動の前衛である。前衛は労働者の団結を守り援助しなければならない。前衛は革命を指導し、斗争の政治的、理論的分析を行なうと同時に高度の軍事的能力をもたねばならない。」と述べている。このことの基本的根拠は、後進国に於いて、その一国のみでの危機が、その国のみの力関係では結着付けられないこと、即ちアメリカ帝国主義の圧倒的軍事力がブルジョアジー、地主プロックを媒介にして投下され、斗いは單にブルジョア、地主プロックではないからだ。それ故に斗いは永続的に國際的背景を持たねばならぬこと、他方で上記の如き都市での労働者人民の潜行的な組織化を行ないながらも、現実的に、圧倒的な職業的目標に関しては、この点でこそ我々は非妥協的でなければならない。」（同）

以上のゲバラの主張は徹頭徹尾リアルで最も実践的な中ソ論争に対する対応である。

ゲバラリカストロ等は、中ソ論争に一定の距離をおいている。だがそれは主体抜きの、どちらか一方を選ぶことに迷っているからではない。彼等は、彼等の中ソに従属しなくても、革命の展望を切り開き得る戦略を持ち得ているし、その戦略から中ソを検討した時に両者の犯罪性と部分性を確認せざるべきであったからであるし、そのことはスターリン主義とスターリン主義の残滓或いは明確にスターリン主義を清算し得ない部分に対する本能的直感でもあった。そして、もつとリアルで実践的な最も世界革命に向け早道なOLASの結成と第三の世界革命の道を開いたのであった。今やアメリカ大陸の階級斗争は史上例をみない最も原則的及び創造的指導部がカーマイケル、SDS、SNCC、カストロリゲバラ或いは中南米における若い断固とした既存の斗わざる左翼組織

反革命軍隊と対決するには農民の土地革命の要求と結びつき、彼等の根強い支援を受けての武装ゲリラ斗争を基礎に農村解放拠点の拡大という革命方式が弁証法的であることを意味している。この革命方式は毛沢東の解放区—赤軍方式と似通っているが、同時にそれ以上に現代的である。何故なら、毛の抗日統一戦線論はなお日本侵略下で民族ブルジョアジー（王陽明、蔣介石）が巨大な部隊を持ち、それ等両者との協定の下での日抗統一戦線であった。だが中南米階級斗争は最もそれを簡素化した。毛沢東の抗日統一戦線論は、現在の周辺革命論の基礎であるが、そのことは現在に於いて一定のマイナス要因に転化していることは否めない。インドネシア革命の敗北はその実例であろう。

(4) 「しかし決定的な瞬間に動搖し、ベトナムを犯すことの出来ない社会主義の領域としなかつたものも、同様に犯罪的である。⋮⋮又社会主義陣営内部の二大勢力相互の侮蔑と嘲笑に満ちた争いを続けさせているものも、また犯罪的である。正直な答を聞きたい。二つの対立する陣営間に危険な共存政策をとることによって、ベトナムは孤立させられているのか、いないのか？」（ゲバラ）「今は論争を慎んですべてを闘争の為にささげるべきときである。⋮⋮論争の当事者が拒否しているのに対話を始める方法をさがすのは徒勞である。⋮⋮そしてこれ等の攻撃が我々を統一させるだろう。我々局外者は⋮⋮決して対立する一方を支持することは出来ない。

にとつて代った二〇代の青年達の組織MIR（チリー）、人民行動隊AP（ブラジル）、コロンビヤ民族解放戦線（FNL）、さらにFLN、FALN（ベネズエラ）等々の単一の世界革命戦略に基づいた確固たる单一指導部を生み出した。彼等は世界階級斗争の鉄火の最前線にアメリカ階級斗争を牽引していくであろう。以上の第三の道派の戦斗宣言に對して我々先進国の共産主義者の任務は如何なるものか。

△△△ 第三の道派としての我々の任務は何か。

ゲバラリカストロは後進国に於いて到達し得る限りの基本的視点に立った革命戦争を開始している。だが、にも拘らず、先進国に於ける階級斗争が今まで、帝国主義に屈服する事態が生みだされるならば、我々が烽火(2)・(3)号で分析した、それ等相互の政治的・軍事的対立、後進国帝国主義癱瘓派を背景に、後進国への侵略と反革命抑圧の集中砲火を浴び孤立し極めて困難な斗いに追い込まれていくであろう。再びソ連修正主義派が台頭するだろうし、中国文革も挫折せしめられるだろう。しかし、他方で、彼等が切り開いた世界革命の第四

の波を、先進国の米、西欧、日本の第三の道派の共産主義者が受けとめ、先進国の反戦斗争や諸個別斗争を国際的世界革命の視点に立って斗い抜くなれば、事態は、第三期階級斗争をしてプロ独リ世界革命の思想に裏打ちされた单一の世界階級に拡げ、深化し、統合していくであろう。このことは、アレコレの予見とは全く相異し、六〇年代後半から七〇年代前後の国際階級斗争が後進国の武装解放斗争の波と先進国の反帝反戦斗争を機軸にした諸斗争が、或いは米帝国主義と他の相対的劣位な先進国帝国主義との経済的政治的軍事的対立から引起される、先進国相互の矛盾が、单一の下から結合を獲得して前進するか否か、その一点を決定的に問われることを示しているに他ならない。この実現こそが世界革命の前哨戦の「要」である。OLASに対して我々は以上をふまえつつ、その前哨戦の「要」での基本的任務を明らかにして應えよう。

あるべき世界革命をめざす「国際共産党」からみた場合の、現時点リ七〇年代前后の世界革命の前哨戦に於ける先進国に於ける階級斗争の問題点と先進国共産主義者の任務は以下のほぼ五点である。

① 単一に結合され始めた国際階級斗争に対しそれを意識化させ排外主義に労働者人民が対決し得る基本的政治内容と国際的プロレタリア統一戦線、及びその政治的ブロックリスローガンについてである。一語でいえば、現在におけるプロレタリア国際主義をはつきりさせることである。

(注) 政党集会による実践との関連での、或いは綱領説明、機関紙の販売、宣伝ビラ、機関紙配布、同盟へのオルグ。

そして我々の斗争が非和解的な権力との暴力的対決を軸とした公然たる大衆斗争を職場から街頭を問わず貫徹されねばならないが故に、それは單なる口先での空文句やエセ革命家などうかの選別に、理論に裏打ちされた革命的実践に於いて我々に不斷に問いかける。かかる権力の国際戦略との確立と国内へのナショナリズムと暴力の攻撃に対決し得る公然たる斗争を、労働者階級の内部から、組織しなければならぬことは、党活動と大衆組織の活動、公然活動、非公然活動、職場諸政黨の活動と再編の確定、或いは、独自路線の現在の意味と実践内容、或いは宣伝煽動の仕方、職場細胞と上級機関に於ける意識のづれから起る現場主義的傾向と機関との遊離等の必然的形成は、根本的に労働運動内部からはじめてボルシェヴィキ的傾向とが実践的路線・方針をめぐって顕在化しつつあることを示している。我々は既定の路線を貫徹しつつ、これらの諸問題をボルシェヴィキ的指導性と体質を、現在的には、①既成統一戦線の分解と再編の科学的確定と、労働運動職場末端での第三潮流形成の統一路線戦術の確立、②他方での合法・非合法活動、党活動と大衆組織の実践的活動形態、それ等の機軸である上からの中央集権的党組織の型を実践的に明確に具体化しなければならぬ。

② 先進国における暴力斗争（街頭機動戦、陣地戦、政治スト、工場委員会）の不可避性と必要性、かつそれとの関連で「民主主義」運動、「全人民的政治斗争」、「個別斗争」の関連と結合された政策への対応とその防衛を軸としたプロレタリア統一戦線の形成について。

③ 今や戦後市民的統一戦線は我々の指摘したように現実的・具体的に崩壊の局面に入っている。そして、今までの上の分解と再編の動向は、日帝の膨張、国際戦略の明確化と暴力の発動を媒介にして即ち反戦斗争が米ーヴェトナムという関係に対する間接的対応から、日帝のアジア侵略と軍事力強化の路線が全面的に開始されることを通して、自國政府打倒斗争に発展し、現実的下部での反戦斗争の実践推進の問題として職場内統一戦線の分解と再編に及びつつある。この時点で文字通り、労働運動に於ける第三潮流の形成の展望が与えられつつある。だが、このことは、既成の職場統一戦線が分解し、逆に、既成の観点に立った技術上の労働運動の左翼的推進をはかることは違つて、勿論それ等を過渡的に含みながらも、その諸技術そのものを把える立場と視点の転換をふまえての根本的には職場に築かれつつある政党の国家に対する根本的態度と路線をめぐって、全ゆる斗争が斗わされる。争われる斗争は分派斗争の過程でもあるが故に、我々にとつては職場に於ける飛躍的な公然たる党活動（注）が展開されねばならない。

④ 権力との真正面からの直接的暴力的対決の必然性と必要性は全ゆる意味で党的維持拡大を、かかる政治過程に對して、合法活動・非合法活動・非合法諸技術として基本的政治的認識を一致せしめ具体的政策として実践化することを要請している。さて以上四点について最初に結論を提起し、その上に、それ等の意味を世界革命とその前哨戦に於ける戦略的観点から明らかにし、ゲバラリカストロ路線を完成させよう。

2 ①については、後進国—先進国、先進国—先進国、後進国—後進国或は非資本主義諸国との諸関係から提出される国際階級斗争の結合の目的意識的環は、①ゲバラリカストロあるいは本論に規定されている意味での民族自決の承認、②自中国政府打倒（特に、先進国リ先進国の関連に於いて）、③労働者国家の帝国主義からの無条件の防衛、以上三つが各國プロレタリアートの国際主義の基本的スローガンでなければならぬ。

以上の基本的政治スローガンの下に、第三期階級斗争への世界的突入に対し、全世界の共産主義者を結集し、何よりもその実践に於いてプロレタリア統一戦線を創出し、第三の道派の結合を基礎にしつつ、中共派との斗争による同盟とその政治的結集及びソ連派との党派斗争との解体を促進することである。

②については、現在の軍事—外交を軸とした先進国競争とアジア侵略が日本帝国主義の生命線的であるが故に、それは

單にナショナリズム攻勢ではなく、ナショナリズムに結びついた、暴力の全面的に発動をともなう攻勢であること、従つて、それ故に我々の政策路線は、かかる暴力を回避しては、

新たなプロレタリア政治は決して形成出来得ないこと、政治的対立はその極限的に暴力的対決に至らざるを得ないのである。この単純な、最もはつきりした真理に対し、それが実現出来るか否かが根本的に今后の政治過程に問われ、政治と暴力とが一体となることを機軸にして、戦後諸党派は実際的分裂に入った。我々は以上のことをはつきりと把みとらなければならぬ。OLASの「革命戦争!!武装斗争が唯一の道である」という主張は、後進国の特殊性に限定することは出来ない。型態や戦術こそ違え、帝国主義の反動と暴力の世界的普遍性に対抗し得る道は全世界労働者人民の暴力から武装斗争即ち現在から将来に於いて工場に於ける政治スト、暴力的占拠—工場評議会による工場管理等の暴力的機動戦—陣地戦の全国的結合を展望していかねばならない。かかる暴力斗争の実現を前提にしてこそ始めて市民主義派とその運動を左翼的に發展転化せしめ得るし、他方個別斗争に於ける根本的な組合主義的質を転換出来得る。更に産別に於ける死活の組織化を地区—機関との結合を媒介に組織化の質を換え得るのである。確かに現在の実力斗争といわゆる「大衆斗争」とは遊離しており、現象的には、大象的実力斗争への發展の道程は、アレカコレカの如く立てられる現状でしかない。だが我

成程我々まで含んで対象化した發展過程はそうであるかも知れないが、実践は我々の主体を媒介にしてのみ考え得ることであつて哲学者風の思考ではなく、実践的我々の活動という観点に立つた場合、我々が今后の基調を形成するかも知れないが、現在に於いては部分としての左派を代表し突出することを前提に全ゆる不均等な意識を反映する諸党派にそれに応じた統一戦線と党派斗争を開始することである。このことの自覚と実践は今我々にとって死活といつても言い過ぎではない。何故なら、その第一は、日本帝国主義の軍事—外交を軸とした国際戦略とその暴力的実現をめぐって、その転換の過渡期がまず上からの政党の分裂によつて開始されながらも、末端職場にまで波及し切れなかつた段階からそれが上から下へ波及し、社会党—総評は末端に於いて本格的分解を開始したことである。社会党—総評の末端組織は言うまでもなく、その主導権を官公労におき、中小企業と若干の民間基幹産業である。構改右派（宝樹派）、協会、構改左派、加入派インター、解放派（謂ゆる社青同）或いは同盟、革共であり、共産党ソ連派、中共派がその末端に於いて勢力の角逐を行なつてゐる。さて、第三期の本格的開始をもつて、組合幹部と社青同を軸に、それを左から突きあげたり協調していた、新左翼系諸派と日共等の既成の職場内統一戦線は、七〇年安保の攻防をめぐつて動搖から崩壊に突入しつつある。

これ等は結論的には、社青同に於ける分解を通して、宝樹構

々の基本は上述の方向で、市民主義運動に対しでは市民主義の發展とその左翼的分解を通じて大衆的実力斗争を推進しなければならない。（注）

（注）だが他方で、斗争の暴力性を全ゆる斗争に貫徹していくことと、暴力斗争が全てであることを等置してはならない。即ち暴力斗争を頂点に、かつそれを基礎にしつつも他方で、大衆の意識の發展段階に応じての、その遊離を埋める方向で、斗争の暴力性を貫徹すべき戦術形態等を考慮し運動全体性に於いて暴力性を貫徹する絶体性が必要である。

他方完全に間違つた考え方、日和見主義の思考は実力斗争を認めるような言質を与えたながら、主体抜きに、大衆の遅れた意識を如何に发展させるかの如く考える思考である。暴力性の貫徹や実力斗争の必要性はわかっているといいながら、その実何も理解出来ていず、その根底には自己の大衆拝跪と遅れた意識、日和見主義に無自覺な諸君である。

③については問題提起を前述したが、その基本は職場内既成統一戦線の分解と我々を軸とした再編を通して、職場末端に党、大衆組織の両者を問わず、合法・非合法活動を駆使し、第三の街頭暴力斗争、工場政治ストリ工場の占拠とプロレタリア管轄をめざす、第三の大衆的政治部隊を登場させることである。この時おさえておかねばならぬことは、既成の統一戦線が自然成長的、丸抱え的に發展転化するのではないこと、

改右派は同盟会議—I MF・JCとの同盟へ、かつ協会派はその内部で、今深刻な党派斗争が展開されているが、彼等は、内部崩壊を遂げるか、議会主義、平和革命の路線故にソ連派と同盟を結ぶか、或いは佐々木派の動向、大田の動向と絡みながら独自の新党結成に向かうか、我々との提携をめざすか等々である。いずれにしても、六〇年三池斗争に於ける五人組—職場斗争、全国統一到達斗争論等ははつきりとその限界を露呈せしめている。構改左派は、我々の如何によつて、日共との対抗関係で左派ブツックの最右派としての一翼をなうかも知れないが、基本的に「左翼」人民戦線の域を出ないことは明確である。加入派四トロ、社青同解放派は今動搖の渦中にいるが、彼等は社会党—民同からの自立を唱え、反戦斗争の推進—反戦青年委の上からの掌握をめざしているが、彼等の加入戦術の動搖は激しい。他方日共、官本派は、民同との労働運動での協調と民社—JCとの一線を画しつつも、潜在的な党内の中共派の動向が外からの中共派諸派の「左翼的動向に影響され、動搖ははなはだしい。これ等諸党派の動向は官公労部内の労働者の左翼的傾向と社会党—総評—組合への不信と相まって、戦後戦斗的市民主義の根本的分解を準備しつつあるし、七〇年前後の攻防は、明確にそのことをドラスティックに推進せざるにはおかしいことである。我々は個々の諸党派の盛衰をアレコレと予言することに興味をもつてゐるのではなくて、勿論そのことも必要不可欠であるが

戦後市民的統一戦線の中核—社会党—総評がその中枢に於いて、排外主義派と合法秩序派と革命的左派に分化しつつあることであり、しかも合法秩序派は徐々に運動の中心的牽引力を全ゆる意味で革命的左派にとて替わられつつあり、その基盤を確実に成熟させつつあることの確認こそ重要である。

第二に、その実践的結論として、全ゆる活動において我々は過去の統一戦線を前提にして問題をたてる思考や、既成指導部の突き上げ、逆手に我々の統一戦線の全体を設定することを決定的に拒否する必要があること。その実践的決断を抜きにしては、実践と結びついた第三潮流形成としての党的公然・非公然活動、地区と産別、機関と末端細胞、反戦運動の大膽な職場への持ち込み等は全くの空語として理論と実践との遊離を引き起さずにはおかないと。我々は基本的に独自の路線を、情勢を先取りじつ貫徹する主体的対応との関連で、統一戦線を再編する必要がある。

④については、第三期階級斗争での新たな政治過程は、常に我々をして、権力の全面的弾圧の前にさらすし、そのことにおいて、党组织の防衛は最も根本的な政治問題として登場するし、それとの関連での合法・非合法活動は一面規定されねばならない。又そのようなものとして政治的に処理されねばならない。しかし組織の防衛は決して個人の防衛と二重写しにされはならない。組織の防衛は革命の担い手としての正に組織での防衛であり、個人の防衛ではない。権力による

言わば七〇年前後の攻防戦に於ける、基本的結論は、世界同時革命の形成に向けての世界戦略と七〇年前後とそれ以降の革命の前哨戦との関連で如何なる位置を占めているか。

我々の世界革命戦略は、単一に後進国階級斗争からの追いや、或いは先進国相互の経済的・政治的・軍事的対立、或いは先進国、後進国を含んだ労働者国家の反革命作戦に反撃した自國政府打倒の斗争が結合して斗われる過程でのその国際階級斗争の国際恐慌との結合に向け、一切を集中することを内容としなければならぬ。单一の世界同時革命の一環としての日本革命戦略は、対外軍事・外交政策の破綻と国内へのはねかえり、国内危機が国際恐慌と結びついた地点こそがそうである。

それが遅いか早いかは現在に於いて確定する必要もないし、わからぬことである。だが革命の客觀条件と主体的条件の基本的ポイントは正にそこにある。

このことを確認する前には、基本的なレーニンの「帝国主義戦争を内乱へ」のスローガンの現在的意味と、第二次世界大戦前後に於ける世界革命の流産に於ける基本的総括が必要である。世界革命の要因は中心的に三〇年代前半に至るまでのコミニテルンの対応に求められねばならない。その基本要因は、全般的危機論と危機の帝国主義戦争の過程での内乱の二つの「現代」帝国主義の評価に於ける誤ちから

組織の弾圧や同盟自身への暴虐は避けられないし、又そのことを絶対に恐れてはならない。問題なのは、かかる不可避的弾圧の中でも、耐えられる、戦略—政治路線の全面的一致であり、その思想—理論—方針—組織拡大を生み出すべき、組織の指揮—活動機構を防衛することである。以上の基本的観点に立って、正に党は党として、大衆の前面に登場し、大衆と前衛との意識の遊離を埋めるべく、党の公然たる独自活動を展開しなければならぬ。

従つて第三期こそ、政党運動の時代として政治活動を公然と展開しても、逆に組織の拡大が圧倒的に実現するものとして、理解されねばならないし、党の表（国会議員、政党による直接の大衆運動の指導、組織、政治集会、機関紙売り、理論機関紙の配布、オルグ活動等）と裏は厳密に区別されて、当初から対応されねばならない。個人の防衛の観点から、それはとりもなおさず五〇年代政治過程の延長としてしか自己を確認し得ないことから起るのだが—理解し得ない場合、全くの無気力な完全な地下団体的陰謀家組織か、完全な合法政党の日和見主義政党の裏表として、組織防衛は結果するであろう。以上の基本点に立つて始めて我々は種々な組織防衛の種々の政策は学び創造されねばならぬ。

③ 以上の、日帝の軍事外交から国際戦略実現に向けてのナショナリズム、軍事力強化、排外主義労働運動形成を基礎とした暴力の反動としてある、第三期階級斗争の政治過程、

の危機の引き延した把握を機軸にした世界革命戦略の誤ちであり、そのことは、一方で、ロシアに於ける労働者権力の防衛を世界革命と不可分一体のものとして、世界革命の一環としてのプロレタリア独裁、逆にプロ独裁を抜きにした、即ちプロレタリアの陣地と結合した世界革命戦略の内的関連性を、全たく曖昧な模倣とせしめたこと、更にかかる戦略の誤ちが後進国解放斗争を先進国と固く結合した意識的世界革命の一環とし切れなかったことである。

それでは基本的世界革命戦略は如何になればならなかつたのか。それは二九年世界恐慌から三二—三年前后に向け、国際恐慌と対外軍事外交問題との結合（米帝国主義II破綻からとじこもりニューディール政策、独II直接的に東欧進出をめぐっての仏、英・米のヴェルサイユ体制を如何なる内容に於いて打破するか否か、日本、韓国から山東出兵—中国蒙古への侵略と中国人民の反撃の国内へのはねかえり等々）を通じた、決定的国内流動を見通し、全般的危機論や帝国戦争を内乱へのスローガンを排して、国際恐慌と対外軍事問題の労働者人民への全面的重圧を内乱に転化する世界革命の戦略（注）に、かつそれに向け労働者国家防衛—内部に於ける階級斗争の激化を世界革命をめざすプロ独運動を通じ集約、後進国階級斗争、世界革命の一環としての結果である。かつかかる戦略に向けての、正にレーニン主義の国際共産党と国内に於ける上からの党の建設の組織論の曖昧性こそが流産の根本的要

因である。

(注)かかる戦略上の誤ちの基本的根拠は、資本主義に於ける階級斗争は、一九一七年ロシア革命の成立以降、資本主義内部に於ける階級斗争を外から外在的に規定し、組織化された労働者階級を生み落すことによつて根本的に帝国主義論の経済法則を貫徹しながらも、資本主義の法則としての、世界市場の再分轄と帝国主義戦争を行なう以前に、それが上から下からかは別にして労働者階級を粉碎し農民、中小企業をブルジョアジーの下に包摶しなければ、逆に帝国主義戦争に突入し得ない内的法則が貫徹したことである。それ故に帝国主義戦争の前段階に於いて、革命か反革命かが国際恐慌と軍事・外交問題の重圧からの内乱のスローガンが決定的であったのだ。以上からかかる矛盾の激烈な資本主義諸国に於いて、ファシズムを生み出さざるを得なかつたのである。我々は革命戦略を、謂ゆる何か特殊な現代資本主義論から導き出そうとは思はない。資本主義の経済法則は資本論を基礎としたレーニン帝国主義論に従つて貫徹されているのだ。このことの重要性をふまえると同時に、だが他方で重要なことは過渡期世界に於いてはかかる経済過程に外から階級斗争が外在的に規定され（内在的にでは決してない！）革命的危機の形成を現象的に、（経済的側面からみれば）

際個別斗争の結合と国際恐慌は、民間基幹産労働者の結集した排外主義労働運動を基礎にした上からのブルジョア独裁権

力を、民間基幹労働者階級自身の反逆と激動を生み出すことによって上からのブルジョア独裁の統治に下からの中小企業、新・旧中間農民の反革命が進行すると同時に、他方でのプロレタリアートの革命との二重権力状況の形成がどのように発展するかは、すぐれてそれ以前の民間基幹部門での組織の確立及び官公労働者が、他の階級をどのような統一戦線に形成しているかこの二つにかかっている。

正に日本帝国主義の七〇年前後をめぐる全面的攻防は、根本的に民間基幹部門でのIMF・J.C.同盟の排外主義労働のおよその確立に対してもこれを、戦後の市民的反政府性をもつた官公労働者の分解再編過程に、ナショナリズム、暴力をもつて、排外主義労働運動に転化せしめることであり、合せて、日本資本主義の停滞の矛盾を受け、非和解な激烈な不满を持つつある、中小企業、農民階級階層に対し、その不満の方向を、民間、官公労の日帝の国際的展望の下、排外主義潮流に包摶することである。逆に我々にとって、軍事・外交・七〇年安保、それをめぐる治安・弾圧に対し、官公労労働運動の分解を予見しつつ、新たな第三潮流に再編し、農民、中小企業を引きつけ、他方、民間への介入の核を広汎に形成することこそ正に世界革命戦略実現に向けての要である。かかる意味に於いて、軍事・外交・七〇年安保をめぐる斗いは、

一だがそのことは革命にとって根本的大が一変化させたのであった。帝国主義戦争については、言葉通り、先進帝国主義間の戦争であることを誤解なきようことわっておく。

以上の基本的視点の下に、特に戦前の日本、独革命の総括を基本点に於いてみていく必要がある。このことは、III章全体に渡つて、結論を更に詳細にしなければならぬ責任を筆者はもつて別稿にゆづる。

さて本題にもどろう。

以上の单一の同時世界革命戦略の一環としての日本革命戦略・対外軍事・外交政策の破綻と国際恐慌の結合としての国内危機を内乱に転化せしめる展望の過程で、七〇年前後の階級斗争は如何なる決定的位置を占めるのか。我々は「政治決戦」或いは革命の「前哨戦」の時期と規定したが、それは如何なる実践的機軸をさすのか。日本帝国主義と国際的階級斗争との関連では、この間一連の見解が発表されているし、本論文において述べているので、それは繰返さない。むしろ実践的にこれ等の国際諸関係が、国内諸関係（権力、階級配置、統一戦線の再編等々）と如何なる結合関係を生み出すのかが実践的にも重要な問題となりつつある。前述した革命情勢の国内に於ける根本的権力と階級流動は、正に对外軍事外交政策（新植民地主義、侵略）反革命戦争を主軸にして先進国との経済（政治・軍事的競争の激化）の普段の国内危機への転化、国

決定的に重要であり、世界革命の前哨戦を占める深さと広さをもつた攻防である。

我々は七〇年前後の斗いを勝利的に乗りきり、国際的プロレタリアートの单一の団結に深く支えられて革命派、合法人民戦線派、排外主義派の三潮流、ティ立の七〇年代プレ・フ

アシズム下の政治過程を迎えねばならない。

そのことを実現することこそがゲバラ・カストロに唯一応える我々の実践的道である。

追記 特に第三章はすぐれて筆者の個人的見解であり、同志、読者諸氏の適切なる批判をおおきたい。尙三章に関しては、更に詳しく述べるのが筆者の責任であるが、紙数の場合もあって別稿で責任をもつて詳しく述べたい。

現代過渡期世界と世界革命の展望

——世界プロレタリア統一戦線・世界党建設の第一歩を——

8・3集会に結集した国際的第三潮流に問われている中心的任务は当面①六九年NATO、七〇年安保を共に闘う。②安保沖縄、ベトナムを環太平洋諸国の武装闘争、ストライキ、デモで闘う。③佐藤訪米を羽田、ワシントンで阻止する。④10・8又は10・21を国際共同行動で闘う。⑤国際共産主義インターへむけての協議機関設立の準備、国際学連の再建。かかる行動組織方針を実現することである。

一、国際集会の中心的任务

世界プロレタリア統一戦線へと同時に第一に如何にして七〇年安保、六九年NATO粉碎、ベトナム反戦を闘う過程で国際反帝統一戦線を中心の路線を解体しつつ世界プロレタリア統一戦線に昂め、世界革命の前衛として、单一の世界党へと組織していくがである。

第二にかかる七〇年前後の国際階級闘争の勝利的前進にお

世界革命理論として整理することは容易ではない。この整理は以下三点において整理され、明確にされねばならない。

第一に、現在の労働者国家の存在と攻撃型階級闘争が進展している過程での、米への日、西独の再分割と米の対抗の抗争関係を集中的に体現する六九年NATO、七〇年安保は（A）帝国主義世界全体に於いて何を意味するか。（B）日、米、西独に於いては如何なる意味をもつか。（C）プロレタリアートにとって、それは何を意味するか。

第二に、日米関係、西独米関係は、日米西独の諸階級、諸階層に、如何なる関係をもち、如何なる反帝統一戦線が形成され、それを如何にプロレタリア統一戦線に再編するか。とりわけ西独、日本での米軍の諸活動に対して西独、日本プロレタリアートは如何に対応しなければならないか。

第三に、世界党 \leftrightarrow 各國党的関連ではどうするか。

以上三点との関連で、自國帝国主義打倒 \parallel 革命的敗北主義は、現代的に革命論的に再構成されねばならない。

非攻撃型理論と中ソスターリン主義不均等発展と過渡期世界の攻撃型階級闘争、革命戦略革命の型、組織論として構成した上で、その路線の下でのプロレタリアートの進撃の内に統一する立場で、現代帝国主義国家の危機の形成の仕方、国家間関係の特異性を指定し得ないところからの二つのプロレタリア国際主義の歪曲の体系がはびこっている。かかる体

いて世界プロレタリア統一戦線の形成、世界赤軍世界党的建設を決定的武器とすることによって、各国党が如何にして西独、日帝のファンズムの成立をもって、かつそれを基軸としたブルジョアジーのヘゲモニーによる世界永続戦争の一切の可能性を粉碎しつつ、一切の攻防をプロレタリアートのヘゲモニーで闘い、逆に帝国主義者の混乱、統括能力の後退、弱さ故の反革命同盟の強化、むき出しのヘゲモニーを喪失して反革命を引きずり出し、プロレタリアートのブルジョアジーへの革命戦争への発展が世界同時革命への転化として闘い抜くかである。かかる課題に応えるものとして又かかる七〇年階級闘争の展望への連結的結節点として、七〇年安保、六年NATOを基軸とする七〇年前後の階級闘争は闘われねばならない。先進国—労働者国家、先進国—後進国を結合せしめるプロレタリア国際主義の内実も、日・西独・米プロレタリアートの結合を核にしてはじめて統一し得る。

だが、先進帝国主義相互の——自國の敗北を促進する方向での自國帝国主義打倒の——プロレタリア国際主義を、現代

系は、先進国共産主義運動を分裂—解体させずにはおかないと。その一つは、不均等発展を階級闘争の基底要因としてみながらも—それ故現代修正主義との決定的境界線を保持して、革命的でありながらも—過渡期世界の攻撃型階級闘争との関連を組み込む方法論が依然として受動理論で、或いは不分明で—結果として—あるが故に、現代帝国主義国家の危機を西独、日本のファシズムの成立と、反革命戦争を巻きこんだ帝国主義間戦争の結果としての革命へと論理的には純化し、従つて反革命同盟の形骸化—解体を展望することから、その現在的活動に主軸をおくことに於て正当性をもちながらも、軸を西独日本のファシズムの動向との対決、反革命同盟との対決とそれを媒介にした日西独での米帝の反革命侵略活動を自國帝国主義打倒との関連に組みこみ得ない体系である。

他の犯罪的な一つは中ソのスターリン主義の体系である。体制間矛盾を世界の基本矛盾として、不均等発展の矛盾をそれに“従属”させ、結果として巨大帝国主義への他帝国主義の従属—屈服論や世界資本主義論争であり、共通に主体抜きの帝国主義の全般的危機 \downarrow 資本主義の自動崩壊論に支えられたものである。ソ連の平和共存世界戦略の下での後進国民族自決統一戦線路線、先進国人民戦線、或いは中共派の周辺革命—中間地帯化 \parallel 反米統一戦線戦略の下での、後進国 \parallel 武装民族解放戦争、先進国 \parallel 左翼人民戦線のその典型である。この世界観は、先進国の共産主義者が遭遇している先進国相互

のプロレタリア国際主義の現在的適用を全く欠落させ帝、日帝の侵略、反革命活動を捨象し、闘争を反米民族主義に歪曲せすにはおかぬ。この二つの体系の再生産は、主体を抜きにした場合、世界は全くあたかも「元論的に展開されるいるかの如くみえる様相を示すからである。

二、現代革命の基本問題

現代帝国主義国家と階級闘争の質、ロシア革命成立以降、更に第二次帝国主義戦争を経ての中国をはじめとする諸労働者国家群の成立をもって増々、労働者階級の攻勢は激化しつつある。労働者国家群を媒介に各国労働者階級は自然発生的、即目的、或いは歪曲され、疎外されながらも世界的に結合され、世界プロレタリアートへと転化した。

最早、ロシア革命以前の如く、プロレタリアートは国民や民族として、国民経済を基礎に帝国主義国家を通じたブルジョアジーの支配の論理に封じ込められ、分断された自然的形態から即目的にではあれ、労働者国家群を結合することによって解放されつつある。

帝国主義者は階級対立を国家間対立として統一することを困難にされつつある。何故なら、内のプロレタリアートを支配せんとすれば、外の労働者国家全体を、即ち世界プロレタリアート全体を支配する能力を保持しなければならなくなつ

濟的優位に加え、かかる歴史的なプロレタリアートとブルジョアジーの力関係の転位からの現代帝国主義国家の危機を反革命同盟でもって糊塗することから他帝国主義に君臨したのであった。これ等のことは、明らかにロシア革命以後、第二次世界大戦を経て、本格的に以前のブルジョアジーの優勢、プロレタリアートの防衛の関係が逆転し、プロレタリアートは攻勢を開拓する力を保持したことを意味する。

米帝国主義の國際憲兵としての、他帝国主義国の制圧と世界プロレタリアートへの反革命を統一し得た根柢は、第二次帝国主義戦争による独、日、伊帝への再分割戦の勝利を基礎にした圧倒的経済力、軍事力、政治力であった。

スターリン主義と攻勢の戦略—戦術 労働者国家の労働者、人民は一国社会主義一段階戦略によつて、自己の歴史的優勢の力としての労働者国家をプロレタリア独裁を形態として世界革命根拠地国家たることから疎外された。帝国主義の包囲下での、しかも後進国での経済—政治面にわたる社会主義建設の困難性の克服の方向は、唯一自らが世界革命根拠地国家として、世界プロレタリアートの攻撃的革命の前衛たることによって、世界社会主義を展望する世界革命政治の一環としての国内プロレタリア政治としてのみ設定される。生産手段の労働者による共同社会的所有に基づく「等量労働交換」の支配する社会主義社会（＝労働証書制）への志向をもつた撥制的労賃制を採用しつつ経済建設の困難性は克服される方向

たからである。国外の階級闘争に反革命的に介入せんとすれば、同様に内のプロレタリアートを粉碎せすには、即ち世界ズムとの永続戦争にむけてしか、対他帝国主義との対抗と国際プロレタリアートのそれは、単独においては統一されない。

帝国主義者は、階級矛盾と帝国主義との不均等発展の矛盾を、以前は国家の論理を媒介に後者に統一し得た。今や、五〇年代の米帝国主義の如き超巨大帝国主義か、あるいは議会制民主主義と労働組合等の一切の民主組織を解体し、プロレタリアートの團結を粉碎する小ブル、農民と同盟したファシズムとの永続戦争にむけてしか、対他帝国主義との対抗と国際プロレタリアートのそれは、単独においては統一されない。

戦後の米帝の全面的な君臨 五〇年代から六〇年代後半の米帝国主義以外の先進帝国主義国家、あるいは後進ブルジョアジー国家は米帝国主義の軍事力を利用することによつて、一応の平和的形態で内のプロレタリアートを支配したが、米帝国主義との相対的劣位な同盟の下に、制圧され、かつ国家の支配の論理を不純なものにしたが故に、小ブル、農民、都市中間層、学生、市民主義、民族主義からの反抗を受けざるを得ず、常に政治的不安定を経済過程とは相対的独立にでも露呈せざるを得なかつた。五〇年代から六〇年代前半の帝国主義国家は、米帝国主義以外、特異な侵略、反革命同盟を結ぶこととを支配機能の重要要素としたのであつた。米帝国主義は経

をもつ。

スターリン主義の発生基盤は帝国主義の包囲の中での経済建設の困難性、主体的には、その克服の方向を攻撃型世界革命戦略を解明し、その下にプロレタリア独裁擬制的労賃制を結合させ得ず一国社会主義一二段階戦略、プロレタリアートの放棄、出来高払い制の導入として攻撃的自然発生性に撃滅し、ついにはマルクス・レーニン主義を放棄したことにある。すでに世界史的にブルジョアジーとプロレタリアートとの力関係が逆転したこと、更に現代帝国主義国家は帝国主義の不均等発展の法則と世界プロレタリアートへの反革命を自力では前者に統一し得ない矛盾を内包していることを述べたが、このことは、現代革命の条件と危機の形成、形態を根本的に受動から攻撃の質へと転換せしめた。即ち、ロシア革命以前の革命の論理は、帝国主義の不均等発展を国家の支配の論理を媒介に、労働者人民を帝国主義戦争に動員し、帝国主義戦争の過程で労働者人民は国境を越え結合し、共産主義者は前衛党を建設し、帝国主義戦争の終結と経済危機の激化を持つて大衆と党は結合することによつて世界革命を実現する内の構造を持っていた。

三、革命戦争、世界同時革命

帝国主義とプロレタリア革命 プロレタリアートはブルジ

ヨアジーの攻勢に受動的に対応し、その攻防の「ヘグモニー」はブルジョアジーにあった。帝国主義戦争の開始から崩壊の過程で攻勢に向かった。だが、現代世界に於て本格化された現代帝国主義国家の危機は、不均等発展の貫徹とそれが攻撃型階級闘争に阻れることによって、内部の矛盾を経済的には膨張しても、政治的には全面的侵略反革命戦争に直線的に外化しえず、逆に外化したものは政治的には内在化するところからの高度の階級矛盾の激成——それが経済危機と結合した地點で革命と反革命として政治的に発現する構造をもつ。帝国主義の侵略、反革命戦争は国内反革命と一体化して発現する。だから、革命の条件は全面戦争の前段階で成熟せざるを得ない。もし、革命と反革命にプロレタリアートが粉碎され得るならば複合的な帝国主義間の反革命戦争の全世界永続戦争へと発展する過程を第二次大戦後一層普遍化しつつある。かかる危機にむけての政治過程の質は、帝国主義にとって、対帝国主義、対反革命を統一せんと志向しつつも、増々乖離させるを得ず、国際的混乱と動搖、不決断、統治能力の圧倒的後退として現出する過程であり、同時にファシズムの萌芽的登場をみる過程である。ファシズムは不均等発展と世界プロレタリアートの乖離をプロレタリアートの攻勢的戦略——戦術の不在からの不決断に対し、小ブル、農民、ルンプロ、知識人等が狂乱化し、ブルジョアジーと結合し、プロレタリアートを暴力的に粉碎する現代反革命の最も鋭い形態である。こ

に慣れ親しみ、権力の攻撃に受動的に反撃する思考を止揚し、敵権力の計画が確定されてもいらないものを確定させていいると想い込み、現在の攻防を位置付けることは、我々を完全な待期主義と日和見主義に転落せしめずにはおかない。かかる戦略——戦術の設定の質はいうまでもなく、革命の条件の形成の仕方、根本的には帝国主義国家の現代的危機に起因することはないうまでもない。だが、スターリン主義は、かかる攻勢の戦略——戦術を國際プロレタリアートの攻撃性を物化し、疎外し、外化させ、帝国主義に和解せしめ、同時に自己を世界革命根拠地国家から疎外された労働者国家へと物化せしめたのであった。我々はプロレタリアートの世界プロレタリアートとしての登場を捨象し（結果的にかもしれない）不均等発展と受動革命の現代革命の「左」からの日和見主義の一派でもない。或いかかるプロレタリアートの攻勢の質を外化させ、不均等発展を捨象する（結果的にかもしれない）右からの日和見主義でもない。

我々は不均等発展の法則が攻撃型階級闘争に圧倒されつづ貫徹され、その政治的発現形態を内から外へ、そして外から内へと累積される矛盾が革命と反革命の型の戦略的路線をブルジョワジーではなく、かかる党とプロレタリアートのをブルジョワジーではなく、かかる党とプロレタリアートの攻勢が政治過程を統一し得ると考える立場である。

これに対して、プロレタリアートは世界党の指導の下、世界プロレタリア統一戦線の一環として、正規軍を赤軍として組織し、帝国主義の普遍的危機を見通し、自ら政治過程を革命戦争として創出し世界同時革命を実現し得る。まさにプロレタリア革命の型は、ブルジョアジーの歴史的弱点と後退に対し、それが「ヘグモニー」を持ち得ないながらも一挙的に展開され、反革命に對してその過程に向けプロレタリアートの国際的革命戦線への一環として正規軍を組織し鍛え抜き、警察権力を凌駕する力量を保持し、帝国主義軍隊内部に不斷に動搖から革命軍と反革命軍に分解せしめなければならぬ。公然たる革命戦争を不斷に組織し統合持続し得る党——赤軍——プロレタリア統一戦線（リソヴェト）の系列が準備され、これを基礎に中央権力闘争とそれへの陣地戦の統合が運動論的に整理されねばならぬ。

攻勢的戦略戦術の確定 ところで、かかるプロレタリアートがブルジョワジーの動向まで見通し、計画的に戦術を開拓し政治過程を主導し抜くプロレタリアートの主体的攻勢とそれを攻勢の理論として統一し切れる質は、プロレタリア革命の戦略——戦術論の内実を受動的なものではなく、自己の将来の計画に逆に敵ブルジョワジーの動向を組み込んだ戦略的展望の下に現在の戦術を設定する攻勢的戦略——戦術論として根底的に認識しなおされねばならない。われわれは、攻撃型階級闘争がいまだ本格的に登場していない戦後第二期階級闘争

四、戦後帝国主義と軍事同盟

米帝国主義は戦後帝国主義世界の盟主としてあつただけではなく、過渡期世界の盟主でもあつた。西欧日本帝国主義に対する圧倒的経済的、政治的優位において制圧し、全世界各國に侵略、反革命軍事網を張りめぐらし、核を独占した。かかる侵略・反革命同盟は、労働者国家と世界プロレタリアートの攻撃性を反革命抑圧することと同時に、他帝国主義国家を牽制する二重の政治的軍事的意味をもつてゐた。又彼等は第二次帝国主義戦争とその終結過程に於て AFLICIO の排外主義労働運動を育成することによって事実上米プロレタリアートを完全に武装解除した。米帝国主義は对他帝国主義、対労働者国家と世界プロレタリアートへの反革命をその政治、軍事力によって統一し、現代帝国主義国家の危機を突破し、逆に労働者国家群をも含め自己の利益を貫徹する世界的秩序（「ヤルタ体制」）に再編したのであつた。

だがかかる米帝国主義国家の存立の基礎は一方での西欧帝國主義、日帝の再分割の挑戦に六〇年代に於て全面的に迫られ、他方西独帝、日帝にはNATO——安保の再編と核保有（すでに仏帝は核武装）を要求され、後進国に於てはヴェトナムを頂点とする人民の反撃の前に後退を余儀なくされた。かかる米帝国主義世界秩序「ヤルタ体制」の動搖から互壊の過程は、米帝国主義内部の自然発生的攻撃型階級闘争を勃

発せしめた。

帝国主義の二律背反的な抗争と依存 索敵して、米帝国主義の侵略と反革命の統一し得る経済的政治的軍事的基盤は失なわれた。戦後ヤルタ「体制」は最終的にそれが、安保・NATOの日帝、西独帝によって再編される地点で、米帝を世界の盟主の地位から引きずり落さずにはおかしい。不均等発展の深化と攻撃型階級闘争の進展は、米帝をして侵略と反革命を統一し得る根拠を消失せしめ米帝国主義国家を死の苦悶に追い込んだ。だが、それは米帝国主義だけの危機だろうか。新興帝国主義西独帝、日帝は米帝にとって替って、かつての米帝の如く侵略と反革命を統一せんと志向している。だが彼らは米帝国主義を苦境に追い込め得ても他帝国主義に圧倒的優位を確保し、同時に帝国主義の腐朽と不均等発展から自然発生的攻撃的階級闘争を反革命一制圧する能力を現在の時点においては持ち得ていないし、また、国内の労働者人民の戦闘組織と議会民主主義制度を解体するファシズム形態も今は持ち得ていない。新興帝国主義国西独は、その新興性故に対外膨脹からの他帝国主義への対抗・攻撃型階級闘争への反革命を統一することを、極度に要請されつつ、国内矛盾を外化し、逆にその結果としての対外矛盾を激化させ、それを再び国内矛盾として累積せしめ、政治的矛盾を深めている。内部にファシズムの萌芽を胎頭させつとも、にも拘らず、自己の現在的力量故に、戦後ヤルタ「体制」—憲法体制あるいは—

たが、労働者国家と攻撃型階級闘争に対する妥協は、帝国主義国家の根本的危機を回避したブルジョワ的な意味で過渡的でしかも、独帝との抗争、米帝の巻き返しに破れることと結合し内部崩壊を五月革命として露呈し、地方的、没落帝國主義特有の永続的危機、死の苦悶を開始した。

五、危機と攻撃的階級闘争

スターリン主義の破産とNATO—安保 まさに帝国主義はその腐朽と不均等発展を拡大・深化し、同時にそこから引き起された攻撃型階級闘争の自然発生的昂揚に対し、侵略と反革命を統一し得ずその政治的発現形態を内部の政治危機の構造化と相互反撥と依存の二律背反的安保・NATOを基軸とする侵略反革命同盟の維持強化に見出したのである。他方スターリン主義によつて労働者国家群はヤルタ「体制」に組み込まれ、帝国主義に屈服し、スターリン主義とスターリニスト・レジュームを定着されるかにみえたが、帝国主義の膨脹と弱さの反映としての反革命同盟の強化の過程で、スターリン主義の破産を労働者国家内部の階級闘争の発現に対しても、反革命的対応と、後進国→国民的統一戦線から民主的民族国家の建設、先進国→人民戦線の路線の反動性として表現した。

労働者国家内部の階級闘争は、かかるスターリン主義とその対極としてのブルジョア民族主義・帝国主義のゆき派を台頭

独体制の枠を突破し得ず、その内部再編を志向することから、その中途半端性は、国内諸階層の統合力をも喪失せしめていのみならず、ブルジョア内部の動搖と分裂を深めている。これら日・西独帝の自己矛盾は根本的には、現在の経済・軍事力・経済力では、侵略と反革命を同時に統一し得ず、不可避的に国内反革命を媒介にしてのファシズム体制を成立させら方向に於てしか危機の突破はありえない。だからといって現在の独帝・日帝の政治委員会が対米帝政策に於てかかる方向に一貫性を保つてゐるかと言えばそうではなく、その逆であり、まさに侵略と反革命を統一しきれない矛盾が極度に体現され、ヤルタ「体制」の枠内からの内部再編の方向とファシズムの方向とは二極に分解してゐる。キージンガーフィー政府は右から、下からファシズムの反乱を抱え、日帝はその政治委員会内部にその萌芽的傾向を抱えている。

以上のこととは米帝国主義のみでも、西独・日帝のみでも、単独では現代過渡期世界をブルジョア的に維持し得る方向をもちえず、即ち侵略と反革命を統一し得ず、安保・NATOを強化しつつその内部でのない手をめぐつての争いとして激化し、帝国主義はその侵略と反革命の不統一性を、国際関係に妥協相互依存と抗争の二律背反的質をもつて体現させるのである。仏帝国主義は米帝国主義の後退に挑戦し、西欧帝國主義の盟主として登場せんとしたが、自己の経済的政治的軍事的力量故に、他帝国主義に対する一定の制圧力を持ち得、

させ、かつ真に革命的な攻撃型階級闘争と結合し、世界革命→世界社会主義に於て、自己の経済的危機を合わせて結合せんとするプロレタリア独裁・世界革命派の萌芽を生み落した。これらの動向は今やペトナムを接点とする段階から、東西独問題、38度線・台湾の緊張等々を媒介に安保・NATO同盟と激突し、世界階級闘争は結合されざるを得ない。

中共はいち早く反米後進国階級闘争の激化からその周辺一段階革命→反米中間地帯化戦略の破産を迫られ、国内階級矛盾をソ連と結合し、帝国主義との軍事的均衡を基礎にして平和共存（裏返しの冷戦）→国内一国社会主義建設の路線をとする方向で解決するか、或いは世界階級闘争と結合し世界革命根拠地国家としてプロ独により解決する方向をとるかを問われた。だが、毛沢東派は從来の世界戦略を後進国に於て経験主義的に修正しつつも先進国革命を機軸にした世界単一の同時革命戦略確定に到らず、周辺→中間地帯化革命戦略を固執することによつてペトナム政策、国内政策を反動的なものにしつつあり、安保・NATO闘争の巨大な意義を見失つていい。

ファシズムかプロレタリア独裁か 以上のNATO—安保

を軸とする過渡期世界の全体の動向の中心点は、以下のことがらである。

第一に帝国主義が死の苦悶を開始し、現代帝国主義国家固有の危機の拡大と侵略反革命の増大を、帝国主義個々の侵略

反革命を統一し得ないところの弱さの反映としての相互反撲・依存の二律背反的国家間関係の強化を通じて実現することによってますます危機を増大させる内部構造を形成することによって政治的帝国主義の破局の歴史的一時代を迎えたのである。安保・NATOを軸とする反革命侵略同盟は、帝国主義世界防衛の最後の帝国主義＝日・独・米帝国主義にとって世界各国プロレタリアートと自国のプロレタリアートに対し、侵略・反革命・抑圧の最後の同盟であり、侵略と反革命命をファシズム以外の形態で統一せんとする、或いはファシズム以外のに連続せんとする最後の死活をかけた最終的反撲の性格故に、安保・NATO改訂維持強化せんとする日・独・米帝国主義の攻撃は自国労働者・世界プロレタリアート労働者国家へも拡がり反革命に転化する質をもつものである。第二に、七〇年安保—六九年NATOを機軸とする日・西独・米の國際反革命—国内反革命の攻撃は他方で一国毎のブルジョア国家の次元からみれば、自らが要求し、請い望んでいた自国一国で侵略と反革命を統一することが不可能になることによつて各国ブルジョワジー相互の抗争は激化し、連絡は混乱し、かつ各國ブルジョワジーは、プロレタリアートの反撃をもつて矛盾を露呈せざるを得ない。自国一国で侵略と反革命を統一し得ないところからの相互依存と反撲の日—米、西独—米関係に対し、小ブル、農民、ルンプロ等々を反政府的立場に追い込みプロレタリアートはそれを引きつける可能の滅。

性をもつ。以上の事は、世界プロレタリアートが、七〇年代攻撃型世界革命を展望することと結合することによって、反革命に對拠し得るし、同時にかかる世界革命戦略の現在的攻防として闘い抜くことによってブルジョアジーの國際的混乱一無計画性、国内的小ブル農民の政府からの離脱を契機にした統合力の圧倒的限界等の帝国主義国家の矛盾を拡大し、プロレタリアートが革命の路線でもって政治過程を主導し、革命戦争への発展から世界革命へと連続させられる。即ち後進国に於てベトナム解放民戦線が反革命軍に對して戦闘のヘグモニーを握り、初期の侵略、反革命戦争の様相を革命戦争に転化させたが、安保・NATOの攻防戦を通じてプロレタリアートとブルジョアジーの力関係を逆转させ、即ち七〇年前後を境に世界階級闘争は全世界各国で革命と反革命の激突に発展する。

第三に、安保・NATOが米・西独・日の国内労働者人民の反革命的抑圧ばかりでなく、後進国人民のそれであり、直接的に労働者国家群の侵略・反革命を準備するものであり、かつ労働者国家内部の矛盾が成熟していることから、逆に安保・NATO闘争は日・西独・米の階級闘争を機軸に、労働者国家、後進国の階級闘争を統合し、完全に単一なものにするが故に、全世界規模でスターリン主義との闘争をし、その分解と破産を用意しなければならない。

以上一、二、三の世界革命の展望に支えられることによつて

て國際反帝統一戦線は世界プロレタリア統一戦線に高められねばならない。第四に、かかる認識に支えられた世界党の建設、各国での革命戦争実現に備えての赤軍建設と世界党の下へのその統合によつて、不斷に分裂と動搖にさらされた“協同”のブルジョワ反革命戦線への世界革命戦線の攻勢とセン

パレスチナ・アラブ人民連帯集会へのアピール

PFLP、アラブ赤軍、日本赤軍、被占領地の息子達の同志達によるシンガボール・クウェート作戦を断乎支持し、又、パレスチナ・アラブ人民と日本・世界人民との連帯の勝利を中心から喜びます。私達はパレスチナ人民を國際帝国主義とシオニズム・イスラエルの搾取者の新たなクビキの下につなぎとめるミニ「パレスチナ国家案」なる陰謀を許さず、これに反対する。パレスチナ・アラブ人民の闘いを全ゆる方法でもつて支持、支援してゆかなければなりません。

米帝等国際帝国主義は、戦後一貫してソ修同盟者にして、民族解放闘争とその指導部たる中国を強權的に封じ込め、第三世界を、封建反動とブルジョア民族主義を利用し、新・旧の植民地主義の下につなぎとめ、反革命・抑圧・搾取・収奪の限りを尽してきた。又、ここから吸いあげてきた超過利潤を西欧帝や日本に投下し、更なる暴利と金融的支配を強めてきたのですが、かかる米帝を主軸とする帝国主義世界体制が、ペトナム・印度支那人民を最先鋒とする全世界人民の反撃において、政治的・軍事的・経済的に解体され、又、他の帝国主義との不均等発展の拡大に規定され、互壊化し始めた

今一つの道は、中国・ベトナム・朝鮮等において成功裡に切
拓かれつつある、民族民主主義革命をプロレタリア的マル
クス・レーニン主義でもって闘い、この徹底の上に連続的に、
国際帝国主義と闘い、世界革命をめざし、社会主義革命を推
進してゆく道です。前者の道は、形式的独立と引き替えて、
国際帝国主義・ショニズム・アラブ反動派等への実質上の民
族的屈服、一握りの資本家や地主の富裕化と他方での大多数
のプロ・農民の貧困・抑圧・榨取の隸属の新たな奴隸化を生
み出す道です。後者の道こそが、現代第三世界人民の危機を
根本的に唯一解決してくれる正しい道なのです。この道は儀
牲の多い道だが、階級的・民族的誇りに満ちた、農工の不均
衡をなくす自力更生の経済と、世界社会主义共同体の利益を
統一し、資本主義をプロレタリア的に利用しうる経済的解放
の道であり、又全世界の人民に貢献しうる偉大な道です。從
つて我々は、世界プロ共産主義革命の一環としての、連続的
な民族解放・社会主義革命を追求する、PFLPに代表され
るPLO左派の路線を支持すべきです。この闘いは、プロレ
タリア世界革命の觀点からみれば、パレスチナ・アラブ人民
が印度支那人民と並んで、石油エネルギーをアラブ人民が革
命的に占取する問題を含んでいいが故に、国際資本主義の土
台を互解させる決定力を秘めているが故に、世界革命の火薬
庫の位置をも含んだ、世界革命戦争の最前線を担う道です。

の経済的再支配に乗り出した。このような、陰険にして、巧かつた、ニクソン＝キッシンジャー戦略の一環として、石油資源の安定確保をめざし、第三次中東戦争を引き起し、期待するほどシオニズムの力量がないとみるや、一転、アラブ反動派、ブルジョア民族主義派やPLO右派を捲き込み、パレスチナ・アラブ革命派の孤立やリビア等の急進的小ブル民族主義を分解させる、「和平」—ミニ「パレスチナ国家」案の策動を打出してきたのです。

こと。かくて、米帝世界体制は構造的危機・互撲に直面し、その敗勢を挽回すべく、一歩後退した力関係を認めた上で、「和平」を通じるなかで、印度支那人民やその他の急進的・進歩的民族主義運動を、「援助」という糖衣砲弾で変質させ、合わせて、自己の肥大化した、金融的・軍事的生産力の過剰の解消をはからんとしてきた。又、この手練手段で中国をヨゴ化する、反革命的策動を開始した。

又、後退した他帝国主義との経済戦に、ドル体制を死守し、多国通商会議に従事する、米帝国際占領本部に援助、元老院、日本等

一 戰略の破綻と結びついて、必ず、その勝利を約束されてい
るのです。この米帝の戰略転換によつて、中国周辺反共国家
の朝鮮・タイ・フィリピン等が危機を迎え、又、新植民地主
義は危機を解決することなく、民族抑圧と階級矛盾を激化さ
せ、これは中進国にまで波及し、第三世界人民の決起はます
ます増大し、中国－印度支那人民はこのペテン戰略を粉碎し
逆制動していること、更に、米帝の經濟的捲き返しは、帝国
主義相互の矛盾を深め、通貨・インフレ危機として爆発し、
政治的不安定を増大し、この矛盾を先進国人民に転化してい
ること、等からして、この戰略は全く白日の痴人の夢でしか
ないことが、はつきりさせられつつあります。

従つて、米帝にあやつられたアラブ反動派やサダト等ブルジョア民族主義、或はこれとは性質が違うがカダフィ等急進民主主義の「和平」—近代化—ミニ「国家案」の破綻は必至であり、アラブ人民は解放されず、アラブ人民は全面的に P.F.L.P 等の人々の闘いを支持してゆく必然性があり、全世界人民が支持してゆく必然性があるのであるのです。

このようないバレスチナ・アラブ人民の連続革命の勝利の展望は存在するのでしょうか？ これはニクソン＝キッシンジャー

命的に占取する問題を含んでゐるが故に、國際資本主義の舞台を互解させる決定力を秘めてゐるが故に、世界革命の火薬庫の位置をも含んだ、世界革命戦争の最前線を担う道です。

2

スラエル・シオニズム、アラブ反動派とブル民族主義打倒で手を組み、世界プロ共産主義革命、世界プロ独、世界革命戦争、三プロック・テーゼ、世界党—世界赤軍—世界革命統一戦線の旗の下、一致団結し前進し得る条件が十分あるようです。我々は、この合流を世界革命戦争—世界党的路線の下におしすすめ、この路線の下に、アラブ革命派は勿論、全世界の革命的翼を統合してゆかなければなりません。しかし、この合流は思想的・綱領的一致をめざし、党建設と共同行動を区別して、戦闘團主義を排して進められるべきです。我々は、これを「世界革命綱領問題」として特に重視し、現代帝国主義批判を深め、中ソ論争を、相対的に中国を我々より以上の経験豊富なマルクス・レーニン主義の正しい路線として、評価しつつ、かつそれを止揚する方向で総括し、世界革命綱領問題を解決し、この成果でもって、ベトナム—中国—朝鮮のプロレタリア党との原則的革命的連携を促進しなければなりません。

△3▽

印度支那三国人民はペテンの和平策動にたぶらかされることはなく、これを利用し、更なる闘いを推進しています。

中国共産党に対する帝国主義者や社帝や反スタ・トロツキストからのニクソン＝キッシンジャー戦略に屈服した「新平和共存路線」とかの、口汚い中傷が投げかけられていますが、私達は、中国人民外交—十全大会—批林批孔鬪争の軌跡を断乎支持すべきです。

△4▽

我々は、このような途上国人民の闘いを民族解放—社会主義、世界革命の観点から支持・支援・連帯し、逆に、日本革命勢力をプロレタリア国際主義の精神でもって改造する契機をつくってゆかねばなりません。

今や日帝の戦後相対的案定期を創出した、技術革新、第三世界人民の源流の収奪と搾取、プロ農民の搾取・収奪・分解・プロレタリア化等を条件とする高度成長＝強蓄積は、日米関係の矛盾、国際帝国主義からの孤立、技術革新の頭打ち化、「資源ナショナリズム」—国際人民の反撃、プロ・農民の反抗、インフレ・騰貴、買占め、「物不足」、都市・農村問題等の爆発となつて破壊した。にも拘らず、日帝はこの矛盾の一切を、国際的・国内的人民に転嫁しつつ、国際反革命、軍国主義、排外主義、差別と分断のなし崩しファシズムでもつて、更なる強蓄積を求めて絶望的暴進をおこなっています。

そしてこの暴進は、更なる国際的・国内的人民の反撃を呼び起し、構成的革命的危機、七〇年安保大会戦のスケールを越えて増え成熟しつつあり、世界革命戦争の先進国での突破口を担う。日本プロ革命戦争の攻撃的蜂起の陣型への、人民の闘いの再編・統合の闘いが緊要化しつつあります。

このようないじ年代中期階級闘争に対して、革命勢力の一翼を担つた「革命戦争」派の闘いは、その端緒期の闘いを赤敗北をもつて好むと好まざると拘らず、区切りをつけられ、革命戦争の端緒期から定着期への移行を正しく行なうこ

中国人民外交は、国際帝国主義と社帝の二つの敵を打倒する程には客觀情勢が成熟していはず、又、これを領導する力量が形成し切れなかつた段階で、これまでの有利な力関係を保持しつつ、次の総反攻に向けて力量を貯えて、持久的に闘う正しい対応であり、その後の十全大会はプロ文革の成果が防衛され、反帝反修と連続革命の路線がしっかりと保持されていることを示したし、又、昨年秋以降開始された批林批孔鬪争の世界革命と継続革命への並々ならぬ決意を示すものです。人を数千年にわたつて毒し続けてきた、支配階級の思想哲学の源流たる「己に克ちて、礼にかえる」の反動綱領に代表される「孔孟の道」をキレイサッパリ一掃する革命的思想運動の大動乱」の「山雨きたらんと欲して、風廊に満つ」の情勢にゆっくりと「左」旋回を開始しているのです。

又、朝鮮労働党は朝鮮南部の労働者・学生の革命的決起を全面的に支持・支援し、世界革命・朝鮮南部解放・継続革命の路線を堅守しています。従つて、アラブ・パレスチナ革命とアジアの民族解放・社会主義革命はより一層固く結合し、世界革命—世界党的実現の条件は十分存在しているのです。

とにかく、この敗北は巨視的にみればプロレタリア革命派の生長の為の不可避の行程であり、この敗北を「悪魔の所業」と深刻振り、悲感し、闘いを清算してゆくことは許されない。この敗北以降問われたのは、無反省・無総括な「革命戦争主義」の贅美を排しつつ、この敗北の経験を正しく総括し、弁証法的唯物論・史的唯物論・資本主義批判を基礎とする革命的マルクス・レーニン主義をもつて、革命主体の思想路線や政治路線を無原則な内ゲバを排しつつ革命左翼内に正しい思想・理論の論戦の作風を養うなかで糾し、綱領と権力問題を解決し、正しい陣型を勝ちとり、この獲得された思想・政治路線の成果をもつて、建党・建軍・革命戦争の路線に生命を吹き込み、この基本路線の堅持の下に、日米帝国主義の国際反革命、軍国主義と差別と分断、搾取と収奪、生活破壊に抗し、決起するアジア・全世界の人民や下層労働者、被差別部落大衆、在日アジア人、女性、「身障者」、老人、沖縄人民、或いは、(獄中)「犯罪者」といわれる人々、農漁民、零落する小ブルジョア層等の多種多様な闘いを、誠心誠意支持・支援し、これらの人々から学び、かつ、同時に、革命戦争の路線へと結集を呼びかけることであったのです。

又、これ等の闘いの中で帝国主義の別動隊に成り下りつある日共や革マルを正しく批判・制動してゆく、反帝反修の二面闘争を執拗に持続することだったのです。

そしてこのような日本革命の道こそが、パレスチナ・アラブ人民との更なる連帯の道だったのです。我々プロレタリア革命派は以上の基本路線の下に、PFLP・アラブ赤軍と連帯し、再出発を開始しなければなりません。

四・一二 東拘にて

☆印刷者による後註☆

「論叢」No.7——「一向過渡期世界論の防衛と發展のため〔2〕前史」は、「ゲバラリカストロ路線とわれわれ」⁸・「3論文」を復刻収録し、前集No.6「(1)序論」に続く付論として急ぎ刊行される。△序▽にも明らかなように種々の事情によって著者自身の△序文▽を付すことが不可能となつた。復刻された二論文に関する詳細は以下の通り。

一、「ゲバラリカストロ路線とわれわれ——いわゆる世界革命の第三の道派について」(関西ブンド政治理論機関誌『烽火』一九六七年一月三日刊、通巻No.5)

尚、末尾△註記▽は、初稿掲載時のものである。

一、「現代過渡期世界と世界革命の展望——世界プロレタリア統一戦線・世界赤軍・世界党建設の第一歩を——」(共産主義者同盟機関紙『戦旗』一九六八年八月五日発行、通巻一四一・一四二合併号)

本論文は、一九六八年八月国際反戦集会にむけて提出された一般に「8・3論文」と呼称される論文の第一章であり、「世界プロレタリア統一戦線・世界赤軍・世界党建設の第一歩を——」の総タイトルのもとに前記『戦旗』八月五日号に掲載された。論文の全体は三章からなり、第一章は塩見(一向健)、第二、第三章はそれぞれ、「七〇年

安保・NATO粉碎の戦略的意義」、「八月国際反戦集会と世界党建設への道」のタイトルのもとに仏、旭両氏によって執筆された。『戦旗』紙上に於いては、「帝国主義の侵略・反革命と対決し、国際階級危機を世界革命へ!」「プロレタリア国際主義のもと全世界人民の実力武装闘争で七〇年安保・NATOを粉碎せよ!」のスローガンとともに掲載されている。

本論集『論叢』No.7に於いては、塩見執筆による第一章のみを復刻した。

これらの両論文は、他の「現代革命I・II・III」、「我々の立脚すべき地点」、「現代攻撃型世界革命と我々」「我々の世界革命戦略と組織論について——現代プロレタリア革命の立場」、「我々の緊急の任務」世界党建設に向けて——現代世界革命序論」等の諸論文との有機的連関をはらみつつ機関誌『赤軍』にいたる最初にして最重要なひとつの大奔流であった。そしてまた、これらの諸論文の重要な結節点たる『赤軍No.4』→一向過渡期世界論の記念すべき最初の号砲でもあったのである。復刻にあたっては明らかな誤字・脱字のみを正すことにとどめた。

また、この四月十四日に開かれた「シンガポール・クウ

エート作戦勝利、パレスチナ・アラブ人民連帯集会」（呼びかけ、パレスチナ解放支援委員会、世界革命戦線情報センター、パレスチナ人民支援センター）へのアピールを合せて収録した。

塙見孝也論叢★1 定価二五〇円

同盟の革命的再建のために（その1）

ある同志への手紙II

同志義理を批判す

塙見孝也論叢★2 定価二五〇円

同盟の革命的再建のために（その2）

連合赤軍敗北の正しい結括の下・プロレタリア

革命主義の旗を高く掲げてきらに前進しよう！

塙見孝也論叢★3

トロツキズム・モ沢東教条主義を止揚し、

プロレタリア革命綱領を獲得するために

塙見孝也論叢★4 定価四八〇円

連赤の責任回避と小ブル民族主義・生産力主義を

批判し、マルクス・レーニン主義の正しい継承と

発展の実践的獲得のために

塙見孝也論叢★5 定価二五〇円

共産同（RG）批判への基本視点・メモ

革左（神）派の坂口君を批判す 他

ブルジョア・マスコミの無筋操かづ

小ブル自由主義的使用に反対！——坂東国男

塙見孝也論叢★6 定価四五〇円

一向透徹的世界論の防衛と発展のために（I）序論

塙見孝也論叢★8 七月刊行！ 予価四〇〇円

一向透徹的世界論の防衛と発展のために（II）現状分析

定価300円（税70）

連絡先=東京都葛飾区新小岩1の9の7 あけみ荘2号室 塙見方「論叢」係

初刷行1974年6月18日 発行者・塙見孝也 (昭和59年、名古屋市中川区)